

## 教師力向上支援事業派遣報告書

- 1 所属・職・氏名 富山県立石動高等学校・教諭・松井優子
- 2 研修期間 令和元年9月15日(日)～令和元年9月23日(月) 9日間
- 3 調査研究課題 ドイツと日本の教育システムの違いについて学び、これからの富山県教育の充実や社会に貢献できる人材育成を目指した教科指導力の向上に対する調査研究
- 4 研修機関等 デュッセルドルフ日本国総領事館、ザンクト・ペーター小学校、アルブレヒト・デューラー専門学校、ゾーリングゲン刃物博物館、デュモン・リンデマン共同基幹学校、デュッセルドルフ手工業会議所、Nessmann bed&heizung GmbH社、EU本部、オルセー美術館、ルーブル美術館

### 5 研修の概要

#### (1) デュッセルドルフ日本国総領事館

総領事館職員の方より、ドイツ社会情勢やノルトライン＝ヴェストファーレン(NRW)州の教育事情全般についてレクチャーを受けた。日本とドイツは戦後の歩みは似ているが、ドイツは連邦共和国であり、それぞれの州が主権をもっているため、経済的予算についても州が運用している。ドイツでは少子化の問題はなく、人口は増加しているが、高齢化は進んでいる。2015年より、難民を多く受け入れており、外国人の割合が22.7%で、そのうち40%が移民である。外国人のうち18歳以下は34%、50歳以上は40%が難民である。それらの人々にドイツ語を教える必要があるが、そのための学校や教員が不足している。難民の高齢化が進んでおり、新たな問題も起こっている。約56%が高校へ進学しており、大学進学を希望する人が増加している。現在、デジタル教育が進められており、今後タブレットを配布していく予定である。

領事館の仕事には、ドイツ人に日本語を教えることもある。その一環として、パンフレットを配布したり、各学校のイベントに参加したりして日本のアピールをしている。また、日本語を教える資格を修得するための教養課程があり、ドイツ人の日本語教員を増やしている。日本人学校への支援として、給料の支給、安全対策支援、日本語補習の講師支援も行っている。

#### (2) アルブレヒト・デューラー専門学校

ノルトライン＝ヴェストファーレン州で最大規模の設備を持つ学校である。職業学校(ブルーフスシューレ)の1つで、日本でいうと高校の位置づけである。授業料は支払わなくてよい。87の教室があり、75の実習教室を備え、1年前に設立された。生徒は職人プログラム(手工業)を学んでいる。学校では、技術以外の「理論」を学び、技術は、校外で学んでいる。例えば、将来コックを目指すのであれば、訓練校を探して1週間のうち3日は現場に行き、2日は学校に通う学び方「デュアルシステム」を採用している。校内には、実習等ができるよう設備を整えているが、そこで技術を学ぶためではなく、授業や各職業の歴史を説明するときに理解しやすいよう整備している。この学校では学問を5つの分野(①建築系②情報メディア系③飲食系④内装系⑤ヘルス系)に分けており、5つの職業分野の「理論」を学校で教えている。職業訓練先は、基本的には自分で探すことになっている。低年齢の生徒もいる基幹学校の生徒等については、学校が訓練先探しを支援することもある。職業訓練先で認められ、卒業後そのまま就職する生徒も数名いる。



飲食サービス実習教室

#### (3) デュモン・リンデマン共同基幹学校

基幹学校とは、10歳から16歳までの子どもが学び、最終的には職に就くことを目的としている。そのため、在学中に職業研修を受けている。多くの生徒は卒業後に職業訓練学校へ進学する。つまり、職業訓練学校へ行く準備をするための学校としての役割を担っている。かつてノルトライン＝ヴェストファーレン州の教育制度は、「物事を終えない(卒業しない)と次の段階は無い」という制度だといわれていたが、2011年に「学業と職業の融合」が提言され、就業を目標としていても、途中から大学へ行けるよ



職業体験の様子(パワーポイントより)

うにするなど、その子どもにとってより現実的な進路選択ができるような制度になり、時代の変化に合わせた学校運営がなされている。職業選択のためのキャリア教育については、8年生から次の①～④のような流れになっている。①自分のポテンシャル（潜在的な力）を知る②どんな職業があるかを知る③実際の職場で体験する④職業学校へ行くのか大学へ行くのかを考える。そのため、『職業選択パス』という記録ファイルを8～10年生はもっており、様々な職業について絵でわかりやすく学んだり、自分のことを探究したり、職業体験で行った記録をファイルに残したりしている。つまり、8年生では自己分析を行い、9、10年生で実習経験を積み、総合的なコンサルティングを学校教育の一環として行っている。近年は、10年生のうち3割は職業学校へ進学し、そのうちの40%が大学に進学している。しかし、大学へ行くためには「アビトゥア」（大学入学資格）をとる必要がある。その他にも校外各機関や企業とタイアップした職業体験の機会がたくさんあることがわかった。最近では、生徒自身がインターネットを使って直接実習先を探し、職業体験することができることも多くなっている。

#### (4) 欧州（ドイツ・ベルギー・フランス）の街や生活より

街では、各国の生活と日本との違いを垣間見ることができた。早期から環境教育に力を入れてきたドイツをはじめ欧州諸国には、街の至る所に分別ごみ箱が設置されていた。ブリュッセルでは、5つに色分けされたごみ箱が設置されており、①青：プラスチック、スチール缶、アルミニウム缶 ②黄：紙 ③白：その他（包装プラごみ、汚れた紙）④赤：コンポストに入れてもよい生ゴミ ⑤緑：植物ごみと分けられ、分別方法は各家庭で幼少期から教わり、学校で教えるわけではない。また、日本では、ごみ箱を背景に馴染ませ、目立たせないようにするが、欧州諸国はごみの種類ごとにカラフルに色分けし、分別方法がよりわかりやすいように目立たせたデザインのごみ箱が多いところに文化の違いを感じた。さらに、エコバッグの普及率も高く、富山も日本国内では先駆けて取り組んできたが、こちらのものはより機能的でデザイン性の高いものが多かった。しかしながら、残念なことにごみ箱がたくさん設置してあるにもかかわらず、路上のごみは日本よりも多く、生活者のモラルが大切であると感じていたところ、休日の街中で自主的にごみ拾いをしている学生たちとの出会いで、心が洗われた。さらに、欧州の街の至る所でピクトグラムを目にした。難民や移民の受け入れを積極的に行っていることも影響しているのか、文字が理解できない人にとって大変重要な情報源になっていると推測された。日本に住み慣れていると、デモ等で急に電車が止まってしまうこと、地下鉄が急に封鎖されることなどはほとんど皆無であるが、世界的視野で見ると、日本が特別なかもしれないと日本の住みよさを再認識させられた。短い期間であったが、欧州ではとても美しい彫刻が施された美しい街並みが見られる一方、そこに暮らす人々のモラル問題や治安、難民問題等、時代の変化に伴う多くの課題を抱えていることを感じた。そして、グローバル社会に生きる生徒たちに考えてもらいたい題材をたくさん見つけることができた。



EU 議会廊下のごみ箱



路上のごみを拾う学生

#### (5) 研修を終えて

海外教育事情視察を通して、ドイツの複線型の教育システムを学んだことは、実習教科としての役割や指導方法について、今まで以上に深く考える機会となった。「なぜこのような工程で行うのか」、「どうしてこの材料を用いるのか」など、その根拠（理論）と実習（技術）の理解を図り、生徒が納得して学べる機会を増やすことが主体的な学びを導き出す方法の一つであると確信した。また、人間社会は、人との繋がりを中心として、文化、宗教、地域性などさまざまなことが絡み合っている。学校で教科書を使って基礎基本を学んだあと、自分の目で見て、体験を通して、実生活（実社会）で確認する（実行していく）機会を学校以外の場で持つことも今後考えていく必要があるのではないかと感じた。そのためにも私たち教員は、生徒の「なぜ」や「どうして」をもっと注視し、その問題を解決するための幅広い知識と視野をもって、社会に生きる一員として、生徒に生涯学び続けるための土台作りをしていきたいと考える。

最後に、このような大変貴重な経験をする機会を与えてくださった富山経済同友会の皆様、富山県教育委員会をはじめとするすべての方々へ感謝申し上げます。